

銀河鉄道の夜

宮沢賢治

## 一、午後の授業

「ではみなさんは、そういうふう川だと言われたり、乳の流れたあとだと言われたりしていた、このぼんやりと白いものがほんとうは何かご承知ですか」先生は、黒板につるした大きな黒い星座の図の、上から下へ白くけぶった銀河帯のようなところを指しながら、みんなに問いをかけました。

カムパネルラが手をあげました。それから四、五人手をあげました。ジョバンニも手をあげようとして、急いでそのままやめました。たしかにあれがみんな星だと、いつか雑誌で読んだのですが、このごろはジョバンニはまるで毎日教室でもねむく、本を読むひまも読む本もないので、なんだかどんなことも

## 一、午後の授業

よくわからないという気持ちです。

ところが先生は早くもそれを見つけたのでした。

「ジョバンニさん。あなたはわかつているのですよう」

ジョバンニは勢いよく立ちあがりましたが、立ってみるともうはつきりとそれを答えることができないうでした。ザネリが前の席からふりかえって、ジョバンニを見てくすくすわらいました。ジョバンニはもうどきまぎしてまっ赤になつてしまいました。先生がまた言いました。

「大きな望遠鏡で銀河をよつく調べると銀河はだいたい何でしょう」

やつぱり星だとジョバンニは思いましたが、こんどもすぐに答えることができませんでした。

先生はしばらく困ったようすでしたが、眼をカムパネルラの方へ向けて、

「ではカムパネルラさん」と名指しました。

するとあんなに元気に手をあげたカムパネルラが、やはりもじもじ立ち上がったままやはり答えができませんでした。

先生は意外いがいなようにしばらくじっとカムパネルラを見ていましたが、急いそいで、「では、よし」と言いいながら、自分で星図せいずを指さしました。

「このぼんやりと白い銀河ぎんがを大きないい望遠鏡ぼうえんきょうで見ますと、もうたくさんの小さな星に見えるのです。ジョバンニさんそうでしょう」

ジョバンニはまっ赤かになつてうなずきました。けれどもいつかジョバンニの眼めのなかには涙なみだがいつぱいになりました。そうだ僕ぼくは知っていたのだ、もちろんカムパネルラも知っている、それはいつかカムパネルラのお父さんの博士はかせのうちでカムパネルラといっしょに読んだ雑誌ざっしのなかにあつたのだ。それどころなくカムパネルラは、その雑誌ざっしを読むと、すぐお父さんの書齋しよさいから巨おおきな本をもつてきて、ぎんがというところをひろげ、まっ黒くろな頁ぺーじいっぱいに白に点々てんてんのある美うつくしい写真しゃしんを二人でいつまでも見たのでした。それをカムパネルラが忘れわするはずもなかったのに、すぐに返事へんじをしなかったのは、このごろぼくが、朝にも午後ごにも仕事しごとがつらく、学校に出てももうみんなともはきはき遊あそばず、カムパネルラともあんまり物を言いわないようになったので、カムパネルラがそれを

## 一、午後の授業

知ってきのどくがつてわざと返事<sup>へんじ</sup>をしなかったのだ、そう考えるとたまらないほど、じぶんもカムパネルラもあわれなような気がするのです。

先生はまた言<sup>い</sup>いました。

「ですからもしもこの天の川がほんとうに川だと考えるなら、その一つ一つの小さな星はみんなその川のその砂<sup>すな</sup>や砂利<sup>じやり</sup>の粒<sup>つぶ</sup>にもあたるわけです。またこれを巨<sup>おお</sup>きな乳<sup>ちち</sup>の流れ<sup>なが</sup>と考えるなら、もっと天の川とよく似<sup>に</sup>ています。つまりその星はみな、乳<sup>ちち</sup>のなかにまるで細<sup>こま</sup>かにうかんでいる脂油<sup>あぶら</sup>の球<sup>たま</sup>にもあたるのです。そんなら何がその川の水にあたるかと言<sup>い</sup>いますと、それは真空<sup>しんくう</sup>という光をある速<sup>はや</sup>さで伝<sup>つた</sup>えるもので、太陽<sup>たいよう</sup>や地球<sup>ちきゅう</sup>もやつぱりそのなかに浮<sup>う</sup>かんでいるのです。つまりは私<sup>わたし</sup>どもも天の川の水のなかに棲<sup>す</sup>んでいるわけです。そしてその天の川の水のなかから四方を見ると、ちょうど水が深いほど青く見えるように、天の川の底<sup>そこ</sup>の深く遠<sup>ふか</sup>いところほど星がたくさん集まって見え、したがって白くぼんやり見えるのです。この模<sup>も</sup>型<sup>けい</sup>をこらんなさい」

先生は中にたくさん光る砂<sup>すな</sup>のつぶのはいった大きな両面<sup>りょうめん</sup>の凸<sup>とつ</sup>レンズを指<sup>さ</sup>し

ました。

「天の川の形はちょうどこんなのです。このいちいちの光るつぶがみんな私<sup>わたし</sup>どもの太陽<sup>たいよう</sup>と同じようにじぶんで光っている星だと考えます。私どもの太陽<sup>たいよう</sup>がこのほぼ中ごろにあつて地球<sup>ちきゅう</sup>がそのすぐ近くにあるとします。みなさんは夜にこのまん中に立つてこのレンズの中を見まわすとしてごらん下さい。こっちの方はレンズが薄<sup>うす</sup>いのでわずかの光る粒<sup>つぶ</sup>すなわち星しか見えなんでしょう。こっちやこっちの方はガラスが厚<sup>あつ</sup>いので、光る粒<sup>つぶ</sup>すなわち星がたくさん見えその遠いのはぼうつと白く見えるという、これがつまり今日の銀河<sup>ぎんが</sup>の説<sup>せつ</sup>なのです。そんならこのレンズの大きさがどれくらいあるか、またその中のさまざまの星についてはもう時間ですから、この次<sup>つぎ</sup>の理科の時間にお話します。では今日はその銀河<sup>ぎんが</sup>のお祭り<sup>まつり</sup>なのですから、みなさんは外へでてよくそらをごらん下さい。ではここまでです。本やノートをおしまい下さい」

そして教室じゅうはしばらく机<sup>つくえ</sup>の蓋<sup>ふた</sup>をあけたりしめたり本を重ね<sup>かさ</sup>たりする音がいつぱいでしたが、まもなくみんなはきちんと立<sup>た</sup>って礼<sup>れい</sup>をすると教室を出ま

一、午後の授業

した。

## 二、 活版所

ジョバンニが学校の門を出るとき、同じ組の七、八人は家へ帰らずカムパネ  
ルをまん中にして校庭の隅の桜の木のところに集まっていました。それはこ  
んやの星祭りに青いあかりをこしらえて川へ流す烏瓜を取りに行く相談らし  
かったのです。

けれどもジョバンニは手を大きく振ってどしどし学校の門を出て来ました。  
すると町の家々ではこんやの銀河の祭りにいちいの葉の玉をつるしたり、ひの  
きの枝にあかりをつけたり、いろいろしたくをしているのでした。

家へは帰らずジョバンニが町を三つ曲がってある大きな活版所にはいつて靴



## 二、活版所

をぬいで上がりますと、突き当たりの大きな扉をあけました。中にはまだ昼なのに電燈がついて、たくさんの輪転機がばたりばたりとまわり、きれて頭をしばったりラムプシェードをかけたたりした人たちが、何か歌うように読んだり数えたりしながらたくさん働いておりました。

ジョバンニはすぐ入口から三番目の高い卓子にすわった人の所へ行っておじぎをしました。その人はしばらく棚をさがしてから、

「これだけ拾って行けるかね」と言いながら、一枚の紙切れを渡しました。ジョバンニはその人の卓子の足もとから一つの小さな平たい函をとりだして向こうの電燈のたくさんついた、たてかけてある壁の隅の所へしやがみ込むと、小さなピンセットでまるで粟粒ぐらいの活字を次から次へと拾いはじめました。青い胸あてをした人がジョバンニのうしろを通りながら、

「よう、虫めがね君、お早う」と言いますと、近くの四、五人の人たちが声もたてずこつちも向かずに冷たくわらいました。

ジョバンニは何べんも眼をぬぐいながら活字をだんだんひろいました。

六時がうってしばらくたつたころ、ジョバンニは拾った活字をいっぱいに入れた平たい箱はこをもういちど手にもった紙きれと引き合わせてから、さっきの卓子テーブルの人へ持もつて来ました。その人は黙だまつてそれを受け取うつてかすかにうなずきました。

ジョバンニはおじぎをすると扉とびらをあけて計算台のところに来ました。すると白服しろふくを着た人きがやっぱりだまって小さな銀貨ぎんかを一つジョバンニに渡わたしました。ジョバンニはにわかに顔いろがよくなつて威勢いせいよくおじぎをすると、台の下に置いた鞆かばんをもつておもてへ飛とびだしました。それから元氣よく口笛くちふえを吹ふきながらパン屋やへ寄よつてパンの塊かたまりを一つと角砂糖かくざとうを一袋ふくろ買かいますといちもくさんに走りだしました。



## 三、家

ジョバンニが勢いよく帰って来たのは、ある裏町の小さな家でした。その三つならんだ入口のいちばん左側には空箱に紫いろのケールやアスパラガスが植えてあつて小さな二つの窓には日覆いがありたままになっていました。

「お母さん、いま帰ったよ。ぐあい悪くなかったの」ジョバンニは靴をぬぎながら言いました。

「ああ、ジョバンニ、お仕事がひどかつたろう。今日は涼しくてね。わたしはずうとぐあいがいいよ」

ジョバンニは玄関を上がって行きますとジョバンニのお母さんがすぐ入口の

### 三、家

室<sup>へや</sup>に白い巾<sup>きん</sup>をかぶって寝<sup>やす</sup>んでいたのでした。ジョバンニは窓<sup>まど</sup>をあけました。

「お母さん、今日は角砂糖<sup>かくざとう</sup>を買<sup>か</sup>ってきたよ。牛乳<sup>ぎゅうにゅう</sup>に入れてあげようと思って」

「ああ、お前<sup>まえ</sup>さきにおあがり。あたしはまだほしくないんだから」

「お母さん。姉<sup>ねえ</sup>さんはいつ帰<sup>かえ</sup>ったの」

「ああ、三時ころ帰<sup>かえ</sup>ったよ。みんなそこらをしてくれてね」

「お母さんの牛乳<sup>ぎゅうにゅう</sup>は来<sup>き</sup>ていないんだらうか」

「来<sup>き</sup>なかったらうかねえ」

「ぼく行<sup>い</sup>ってとって来よう」

「ああ、あたしはゆっくりでいいんだからお前<sup>まえ</sup>さきにおあがり、姉<sup>ねえ</sup>さんがね、トマトで何かこしらえてそこへ置<sup>お</sup>いて行<sup>い</sup>ったよ」

「ではぼくたべよう」

ジョバンニは窓<sup>まど</sup>のところからトマトの皿<sup>さら</sup>をとってパンといっしょにしばらくむしゃむしゃたべました。

「ねえお母さん。ぼくお父さんはきつとまもなく帰<sup>かえ</sup>ってくると思うよ」

「ああ、あたしもそう思う。けれどもおまえはどうしてそう思うの」

「だって今朝けさの新聞に今年は北の方の漁りようはたいへんよかったと書いてあったよ」

「ああだけどねえ、お父さんは漁りようへ出ていないかもしれない」

「きつと出ているよ。お父さんが監獄かんごくへはいるようなそんな悪いことをしたはずがないんだ。この前お父さんが持ってきて学校へ寄贈きぞうした巨きな蟹かにの甲こうらだのとなかいの角つのだの今だってみんな標本室ひょうほんしつにあるんだ。六年生なんか授業じゅぎょうのとき先生がかわるがわる教室へ持もって行くよ」

「お父さんはこの次つぎはおまえにラッコの上着うわぎをもつてくるといったねえ」

「みんながぼくにあうとそれを言いうよ。ひやかすように言いうんだ」

「おまえに悪口わるくちを言いうの」

「うん、けれどもカムパネルラなんか決けつして言いわない。カムパネルラはみんながそんなことを言いうときはきのどくそうにしているよ」

「カムパネルラのお父さんとうちのお父さんとは、ちやうどおまえたちのよう

に小さいときからのお友達ともだちだったそうだよ」

「あだからお父さんはぼくをつれてカムパネルラのうちへもつれて行ったよ。あのころはよかったなあ。ぼくは学校から帰る途中とちゆうたびたびカムパネルラのうちに寄よった。カムパネルラのうちにはアルコールランプで走る汽車があったんだ。レールを七つ組み合わせるとまるくなつてそれに電柱でんちゆうや信号標しんごうひょうもついていて信号標しんごうひょうのあかりは汽車が通るときだけ青くなるようになっていたんだ。いつかアルコールがなくなつたとき石油せきゆをつかったら、缶かんがすっかりすすけたよ」

「そうかねえ」

「いまも毎朝新聞をまわしに行くよ。けれどもいつでも家じゅうまだしいんとしているからな」

「早いからねえ」

### 三、家

「ザウエルという犬がいるよ。しっぱがまるで箒ほうきのようだ。ぼくが行くと鼻はなを鳴らしてついてくるよ。ずうっと町の角かどまでついてくる。もっとついてく

ることもあるよ。今夜はみんなで烏瓜からすうりのあかりを川へながしに行くんだって。きつと犬もついて行くよ」

「そうだ。今晚こんばんは銀河ぎんがのお祭りまつだねえ」

「うん。ぼく牛乳ぎゅうにゅうをとりながら見てくるよ」

「ああ行つておいで。川へははいらないでね」

「ああぼく岸きしから見ただけなんだ。一時間で行つてくるよ」

「もっと遊あそんでおいで。カムパネルラさんといっしよなら心配しんぱいはないから」

「ああきつといっしよだよ。お母さん、窓をしましておこうか」

「ああ、どうか。もう涼すずしいからね」

ジョバンニは立つて窓まどをしめ、お皿さらやパンの袋ふくろをかたづけると勢いきおいよく靴くつをはいて、

「では一時間半はんで帰かえってくるよ」と言いいながら暗くらい戸口とぐちを出でました。